

【氏名】多田 透

【所属大学院】(助成決定時)

大阪大学大学院 国際公共政策研究科

【研究題目】

複合的危機における国際人道支援活動の調整

－ 2003 年以降のイラクにおける UNHOCI と NCCI の比較 －

【研究の目的】

1990 年代以降、国際人道支援活動に携わるアクターの増大と多様化が進んだため、調整の重要性は社会的にも学術的にも高まってきている。ただし既存の学術研究には、明確な分析枠組みが未だ確立されていないこと、国連機関間の調整の研究に大きく偏っていること、という 2 つの問題がある。

そこで本研究は、2003 年以降のイラクを事例に、人道支援に関連する国連機関の活動を調整するイラク人道問題調整官事務所 (The Office for the Humanitarian Coordinator for Iraq: UNOHC) と、NGO 同士の活動を調整するイラク NGO 調整委員会 (NGO Coordination Committee in Iraq: NCCI) との役割の違いを探り、かつその過程で、既存の国際関係論での調整研究の議論も参考にしながら、明確な分析枠組みを確立することで、学術的、社会的な貢献を果たそうとするものである。

【研究の内容・方法】

人道支援活動の調整を分析するのに有益と思われる国際政治理論の分析枠組みを検討したが、その多く(たとえばレジーム論)は、いずれも非国家行為主体間で形成される調整体を分析するには適さなかった。また、NGO 間の調整が、国連機関間の調整と異なり、事前に調整体形成に関する明確な取り決めがないという特徴に着目するならば、NGO 間調整体の役割は、その形成理由から説き起こす必要があると考えた。他方、人道支援活動の調整を論じた先行研究が主に注目していたのは国連機関間のそれであったので、分析枠組み構築の参考になりそうに思えた文献の中でさえも、なぜ調整体が形成されるのかは、検討されていなかった。

分析枠組みを立てるに際しての上記のような困難性を踏まえ、次のような分析方法を取ることとした。もしも人道支援活動の重複やギャップを解消したり、情報交換をしたりするために調整体を形成するのであれば、わざわざ NGO のみを構成員とする調整体を形成する必要はないはずである。とすれば、「なぜ NGO のみで構成される調整体が形成されるのか」は、重要な問いになるはずである。そこで、この問いを明らかにする形で NCCI の分析を進めた。

この点につき、日本では日本イラク医療支援ネットワーク (JIM-NET) の佐藤真紀氏、Friends of Mercy Hands の清末愛砂氏 (推薦者 2) などへのインタビューを行った。ヨルダンのアンマンでは

NCCI の事務局長、OCHA の現地代表をはじめ、NCCI の形成に大きく貢献した NGO である Première Urgence や OXFAM のスタッフ、ファルージャ危機の際に現地住民として NCCI の調整会議に参加していたジャーナリスト、NCCI の外部評価報告書の執筆者などにインタビューを行った。なお、議事録に関しては、イラクの特殊な治安状況のため、メンバー団体に所属しない一個人である当方への開示は実現しなかった。

【結論・考察】

インタビューの結果、NCCI が形成されたのは、単に調整の必要性があったからという理由だけではなく、NGO が自らを国連や米軍といった、政治的な主体とは異なる、あるいは距離を持った集団であるということを示したかったからだということが明らかになった。

次に、この NCCI 形成の理由が、UNOHCI の役割との間にどのような違いを生じさせたかについてであるが、少なくとも次の 2 点を検証することができた。

まず、NCCI が人道支援活動の調整だけでなく、現地の人道状況に関するアドボカシー活動（政策調整）にも力を入れたことは、この形成の理由から説明するのが最も自然である。こうした趣旨の政策調整は UNOHCI とは異なる、独特の機能である。

また NCCI が、2004 年 4 月に起きたファルージャ危機などにおいて、現地に対する人道支援活動の調整で一定の役割を果たしたこともインタビューから裏付けられた。これを可能にしたのも NCCI が米軍等との距離を保っていたからに他ならない。